

この作品は傑作です。

前作の好評に誘われて買った人も、なんとなく手に取ってレジに向った人も、決して期待を裏切られることはない。ピアノ・トリオ＋テナー・サクソというフォーマットのジャズ・アルバムはゴマンとあるけど、これはそれらのジャンルで、前作と並び、10本の指に入る内容を持っている凄い作品。

エディ・ヒギンズは1932年生まれで、この2月（2003年）に71歳になった。結構な年齢であるが、ジャズ・メンには年を超越した才能を発揮する人が時々いる。彼はそういう素材だ。1960年に発表した「エディ・ヒギンズ」（ヴィー・ジェイ）で注目されたが以後は決してジャズの表街道を歩んだとは言えなかった。それが、90年代後半から現在のヴィーナス・レコードでの積極的な録音が始まり、数々の名アルバムを生み出すことになる。日本人のテイストに合うと判断した制作者は偉い。それに応えたエディ・ヒギンズもまた偉かった。

プロデューサーであるヴィーナス・レコードの原社長同席で、彼にインタビューをしたことがあるが、ピアニストの制作者に対する態度は信頼と余裕に溢れたもので、見ていて気持ちが良かった。勿論のこと、制作者の雰囲気も畏敬と慈愛に満ちたもので、要するにすこぶる美しい関係だったのだ。

おそらく二人とも最初はこんなにうまく行くとは思っていなかったのではないが、なぜなら、アンダーレイテッドなピアニストはジャズ界にいくらもいるし、近頃は邦人の活躍も目覚ましいからだ。しかし、ここが凄いところなのだが、エディ・ヒギンズというピアニストは年輪を重ねるごとに輝きが増すタイプで、加えて制作側の真摯な態度が彼に発奮を促したのだろう。要するに、この男のためなら頑張るぞ、という心持である。それが数々の傑作の誕生につながり、また好調なセールスを可能にした。いいものはいいと、人々が認めたからである。

一方のスコット・ハミルトンは、遅れてきたスイング・テナーと言われてきた。遅れてきたとは、現下のモダン・ジャズのスタイルより一つ前のサウンドと個性を持って登場した、という意味だ。ちなみにエディ・ヒギンズとは22歳の年齢差がある。それが、どういう天の配剤か、いぶし銀のピアノに実に美しくマッチしたのである。よほど普段の心がけが良かったのだらう。それと、こいつはエディ・ヒギンズに添わせたらうまく行くぞと踏んだ制作者も、慧眼であった。

前作で証明されたように、二人の組合せはまことに芳醇なジャズ世界を作り上げ、高い評価を得た。そして素晴らしいセールスにも結びついた。端正なエディ・ヒギンズのピアノが、骨太だが決して野卑ではないスコット・ハミルトンのテナーに出会って核融合が生じ、膨大なジャズのエネルギーが放出されたのである。1+1が100になり1000になった。こういうことがあるから、ジャズを聴くのが止められなくなるのである。

前作から約1年後の録音だが、基本的に、前との同様の世界がここでは開陳されている。ドラムスはビル・グッドウィン、ベースはステイブ・ギルモアという顔触れ。しかし不思議なことに、二番煎じという感じがしない。二人の名人の紡ぎ出すジャズの感興に、ゆったりと身

My Foolish Heart マイ・フーリッシュ・ハート
Eddie Higgins Quartet ~featuring **Scott Hamilton**

エディ・ヒギンズ & スコット・ハミルトン

1. マイ・フーリッシュ・ハート
My Foolish Heart (V. Young) (5:25)
2. ロシアの子守歌
Russian Lullaby (I. Berlin) (7:54)
3. ホワット・イズ・ゼア・トゥ・セイ
What Is There To Say (V. Duke) (5:35)
4. ザット・オールド・ブラック・マジック
That Old Black Magic (H. Arlen) (5:17)
5. スカイラーク
Skylark (H. Carmichael) (5:53)
6. 夜も星も
Night And Day (C. Porter) (5:44)
7. エンブレザブル・ユー
Embraceable You (G. Gershwin) (6:22)
8. アム・アイ・ブルー
Am I Blue (H. Akst) (5:59)
9. ジーズ・フーリッシュ・シングス
These Foolish Things (I. Stacey, H. Link) (6:05)
10. ザ・モア・アイ・シー・ユー
The More I See You (H. Warren) (6:18)
11. ザ・ソング・イズ・ユー
The Song Is You (J. Kern) (5:42)
12. ジス・ラブ・オブ・マイン
This Love Of Mine (S. Parker, H. Sanicola) (6:23)

エディ・ヒギンズ Eddie Higgins - piano
スコット・ハミルトン Scott Hamilton - tenor sax
スティーブ・ギルモア Steve Gilmore - bass
ビル・グッドウィン Bill Goodwin - drums

録音:2002年9月26、27日 ニューヨーク、アバター・スタジオ

© 2003 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

Produced by Tetsuo Hara and Todd Barkan
Recorded at Avatar Studio in New York on September 26 and 27, 2002.
Engineered by Jim Anderson, Assistant Engineer by Aya Takemura.
Technical Coordinator by Derek Kwan.
Mixed and Mastered by Venus 24bit Hyper Magnum Sound :
Shuji Kitamura and Tetsuo Hara.
Front Cover : © Paul Földes / G. I. P. Tokyo.
Photo by John Abbott . Designed by Taz .
Scott Hamilton appears courtesy of Concord Records .

を任せればよい。

インタビューした時、エディ・ヒギンズに対し、あなたは歌を歌いますか、という質問をした。なぜなら、彼のピアノはこよなく美しくスタンダード・ソングを歌い上げるからで、それは歌詞の意味を深く解釈して絶妙の歌の世界を作り上げているからだだろう。これはきっと歌の上手な人に違いないと、そう思ったからだ。

ところが、返ってきた答えは、シャワーで歌うくらいかなという、素っ気なくもユーモラスなもので、こちらの目論みはあっさり外れた。

歌を歌うことと、素晴らしい歌の解釈をピアノで行うこととは、当然ながら別だったのだ。それでも、エディ・ヒギンズの奥さんは歌手だということを、後から聞いた。そうなのか、と思ったことである。

曲目紹介

「マイ・フーリッシュ・ハート」ピクチャー・ヤングの傑作。ビル・エバンスの名演でも知られるスタンダード。これがオープナーということに、余裕と積極性を感じる。誰もがエバンスとの比較をするからだ。エディ・ヒギンズ・ファンはビル・エバンス・ファンと重なることを、ピアノ好きは知っている。エディ・ヒギンズはあっさりとし、しかし情緒をしたたかせながら映画音楽の古典を料理する。スコット・ハミルトンの音色の素晴らしさと、ピンテージ・ワインのような豊かなボディがここで提示される。

「ロシアの子守唄」ロシア移民のユダヤ系アメリカ人アービング・バーリンの地味な佳曲だが、ジョン・コルトレーンが取上げてジャズ・ファンには御馴染みのものになった。泣き節を過度に強調せず、リズム

ツクな聴き応えのある内容にするスコットのワザはなかなかのものである。

「ホワット・イズ・ゼア・トゥ・セイ」日本人ならではの選曲で、ここではジェリー・マリガンの佳演を思い出すジャズ・ファンが多いことだろう。ロシア亡命貴族だったヴァーノン・デュークの、気品とモダンイズムが見事に溶け合った曲を、スコットとエディがたっぷりした包容力を感じさせて歌い上げる。

「ザット・オールド・ブラック・マジック」このアルバムは制作者の頭の良さを感じさせる曲の並べ方がなされており、バラードでウツリさせたとしたら、次はリズムの勝ったナンバーを配して、単調になるのを防いでいる。ハロルド・アーレンの有名なスタンダードを、二人は気分を出して自分たちのものにしているのが良い。

「スカイラーク」稀代のメロディ・メーカーであるホギー・カーマイケル
 の名曲。スローで難しい作品だが、それをくどくなく、しかし思い
 入れたっぷりに提供するところが二人の真骨頂だろう。

「夜も星も」コール・ポーターの代表作であり、ケーリー・グラントが演じたその半生記映画ではタイトルになった。メディアム・テンボでくつろぎと色気を充分に放ちながら、ジャズ的スリルがある。バリバリと吹いてもスコットの演奏は決して過剰ではなく、これに従うエディもツボを心得た配慮を見せる。

「エンブレイサブル・ユー」今度はガーシュウィン・チューン。ミュージカル「クレイジー・フォー・ユー」でも効果的に使われていた。コールマン・ホーキンス風の男性的なサウンドを響かせつつ、デリカシーを失っていないスコットは見事。エディも随所に彼らしい曇みかけをして、耳タコもののスタンダード・ソングから歌心を引き出している。

「アム・アイ・ブルー」古い佳曲だが、コケットリー溢れた曲想で、二人の息のあった掛け合いが心地よい。近年演奏されたこの曲の中でも最良の解釈であろう。

「ジーズ・フーリッシュ・シングス」愚かなあれこれと、去った人の思い出の品々をよすがとする切ない気持ちを歌い上げたスタンダード。ジュリアス・シーザーが「ガリア戦記」の中で記した「来た、見た、勝った」という有名なフレーズが歌い込まれたお洒落な曲をエディとスコットが、見事に料理する。

「ザ・モア・アイ・シー・ユー」会えば会うほどつのる恋心を歌い上げた、これも有名なスタンダード。ハリー・ウォーレンの代表的なナンバーを、こうも新鮮に聴かせる力量に脱帽。

「ザ・ソング・イズ・ユー」スタンダード・ソングの開祖と言われるジエローム・カーンの名曲。程よいテンポで、この曲の魅力を巧みに引き出し、極上の歌の世界を紡ぎ出しているのが素晴らしい。

「ジス・ラブ・オブ・マイン」作り手の一人であるフランク・シナトラの名唱で知られる比較的新しいスタンダード。アルバムの締めくくりに相応しい余韻溢れる演奏。エディ・ヒギンズとスコット・ハミルトンの筆舌に尽くし難いコラボレーションは、もう一度最初から聴きたくなる人が多いはずだ。

馬場啓一